

ある。第二点は、彼らだけでなく全体的な混乱の背景にあると思われる、記述の際に用いられる概念・カテゴリー・名の由来についての混迷である。「Vocales」につながると見られるが、当時いまだ名を与えられていなかった一群のテキストの立場をどのように名指すべきか。それを、マレンボン氏は歴史を超えた「哲学的な諸立場」のカテゴリー分けの問題として扱われているようである。

ここで emic と etic という用語対を導入したい。言語学と文化人類学という二つの由来を持つため定義に揺れがあるが、一般に流布している理解に従い単純化すれば、前者が特定の対象集団に意識化・運用されている分類カテゴリー、後者が観察する側、研究する側が持っている（普遍的・科学的とされる）カテゴリー（の／による分析）である。岩熊氏の研究は、基本的に、当事者に意識化された諸立場の emic 的な追跡を目指すのに対し、マレンボン氏が *vocales* と *pre-/proto-vocalists* に見出そうとするのは「哲学的」な立論であり etic 的な探求である。無論、文化人類学や言語学と違い、私達の間で直接答えてくれるインフォーマントはいないため、資料上で追える学派のラベルを超え、ある理論的な立場が意識化され存在していたのかどうかについて論じるのであれば解釈の余地が多分に入ってくる。岩熊氏の *vocales* 以前へのアプローチが、これまで以上に議論を引き起こしたのは、*vocales* についての議論とは違い、当時いまだ名指されていない立場についての、端的に emic に留まることの難しい議論に踏み込んでいるからではないだろうか。Emic なのか etic なのかという点についての研究者間での了解の不在が、この議論を本来以上に混乱させ続けているように思われる。

回 答 矢内氏への回答

便宜上第二の質問から答えたい。

写本ではロスケリヌスに帰されている『範疇論』注解は、その後の再検討によってロスケリヌスのものではないと現時点では判断している。むしろ LNPS と同時期のアベラールの教説をその弟子が記録したものだと思われる。（拙論『ロスケリヌスの「範疇論」注解』の結論は残念ながら撤回しなければならない）。従って、ロスケリヌ

スの確実な著作として我々が有するのは、従来から知られていたアベラール宛書簡一通のみだということになる。ロスケリヌスが proto-vocales の一人であり、アベラールに強い影響を与えたことは疑いえないが、それを具体的に論じるには、従って資料が少なすぎるといわざるをえない。

第一の質問に戻る。Vocales という語を提出して私が最も訴えたかったことは、既に様々な含意を含んでしまっている「実念論・唯名論」というような既成の用語をテキスト解釈に安易に持ち込むことの危険性にあった。その時代に実際に用いられていた「用語」と我々がテキスト解釈に持ち込む「解釈用語」とは峻別しなければならない。その意味で、〈アンセルムスが実念論者であったか?〉という問に対しては、「否」と答える。アンセルムスの時代にはいまだ reales という語は出現していなかった、という単純な歴史的事実に基づいてである。とはいえ、筆者自身が止むなく導入した解釈用語 proto-vocalism に準ずれば、アンセルムスを proto-realis と呼ぶことは可能であろう。後の世代の reales の説の先駆をなすという意味である。拙論“Realism”で論じたように、ギョームの materialis essentia 説にはアンセルムスの影響が確かに見て取られる。但し、実際には、12世紀の reales の論理学著作にはアンセルムスへの直接の言及は全く見られない。その意味ではその影響は間接的なものに過ぎない。また、本論で示したごとく、11世紀末から12世紀にかけては、存在論が主要な論点では決してなかったことにも注意しなければならない。アンセルムスの locus classicus についても、この方向で再解釈することが十分に可能であると筆者は考えているが、それを十分に展開するには残念ながら与えられた紙幅が足りない。

回 答 関沢氏の特定質問について

本論の原型をめぐって、2007年一年間の筆者のパリ滞在中、Irène Rosier-Catach と Margaret Cameron と議論を重ねた。時に John Marenbon 他も参加した。多岐に渡る岩熊批判の中で何が中心的争点なのか筆者自身よく見極められないままに帰国することになった。しかし、議論のほとんどに同席した関沢氏から、主要な対立点についての第三者的立場からの冷静で明快な俯瞰がここに与えられた。氏にはあらためて

感謝したい。写本研究を主たる方法とする研究者としない研究者とのあいだにある種の断絶があるのを筆者は従来から漠然と感じて来たが、その主要な要因もここに明らかになった。ちなみに Rosier-Catach も Marenbon も後者のタイプの研究者である。彼らの諸批判に答えることを通して論点をより明確にすることが出来た点で、筆者は彼らに感謝している。とはいえ、関沢氏が述べるような意味で本論の結論にはいまだ彼らの賛同が得られていないことに読者は注意されたい。さらに、哲学史研究の方法論としての emic 的立場と etic 的立場との相違および両者がそれぞれどうすればより実り多いものになりうるかは、今後に残された大きな検討課題である。